

釧路教育 316

令和6年3月

発行／釧路市教育委員会 教育支援課 釧路教育研究センター

〒085-0016

釧路市錦町2丁目4番地 Tel (0154)23-5189 Fax (0154)25-5999



巻頭言

「子供たちの可能性を引き出す学びの実現」

釧路市教育委員会 学校教育部長 齋藤 優治

「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」。これは『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』という中央教育審議会が令和3年1月に公表した答申書のタイトルです。答申では、「令和の日本型学校教育の構築に向けた今後の方向性」の中で、ICTや先端技術の活用により今後可能になることとして、学習状況に応じた教材等の提供により効果的な学びを行うことや、教育データの収集・分析により効果的な学習方法等を特定することなどの事例が想定されています。

釧路教育研究センターでは、市の教育目標や教育推進基本計画に掲げた施策と、教育現場の実践を結びつけていくため、現在、3つの研究グループ（学習指導・開発、子ども支援、郷土読本・地域学習）に所属する先生方のご協力いただき様々な調査研究を行っているほか、教職員向けの研修などを実施しております。

このうち、調査研究事業では、「学習指導・開発研究グループ」において、1人1台端末の効果的な活用法に関し、市内の実践例を収集し、他校の先生方に向けて発信していただいています。また、釧路市教育委員会では、各小中学校に校務支援システムを導入しているところであり、令和6年度からの本格稼働時には、子供たちの出欠や生活・健康状態、指導要録などの情報に加えて、タブレットドリル、CRT、定期テストの結果などとの連携も可能となる見込みであり、個別最適な学びに向けたICT環境が着実に整いつつあります。

一方、研修事業では、昨年10月に、「大館に学ぼう～大館市授業マイスターの授業を通して～」と題した研修を実施し、小学校では中嶋恵先生に4年生算数科「考える力をのばそう」について、中学校では根本大輔先生に2年生国語科「新聞の比較読み」について、示範授業を行っていただきました。両マイスターとも、来釧の翌日という授業日設定で、児童生徒と打ち解ける時間が十分に取れない中にも関わらず、多くの子どもたちが授業に積極的に聞き入り、発言し合い、それぞれの考えを深めていく様子が見られました。私は、両授業とも参観しましたが、慣れない先生に対し多少はにかみながらも、キラキラと目を輝かせて授業に臨む子供たちの姿は今でも忘れられません。GIGAスクールによる1人1台端末の普及とコロナ禍が同時に到来し、リモート授業が日常化しましたが、「協働的な学び」については、クラスメイトなどと同じ時間や空間を共有し刺激し合うことにより生まれるものであると感じました。同時に、授業の中で教材や学習の視点や手法などを適切に提供し、運営する先生の役割は重要であり、その存在が子どもたちにとって如何に尊いものであると改めて実感しました。

義務教育の目的のひとつに「各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培うこと」が教育基本法に規定されており、第3期釧路市教育推進基本計画にも、副題として「子どもたちの『生きる力』を育むために」を掲げています。子供たち1人1人の興味や関心、能力に応じて、その意欲を高め、適切な学びを促していくことは非常に難しいことです。しかしながら、釧路の子どもたちが、予測困難な社会にあっても、自ら課題を見付け・考え・判断して行動し、結果として幸せな人生が送れるように、教育現場と教育委員会が力を合わせて「子供たちの可能性を引き出す学びの実現」に引き続き取り組んでいきたいと思いを強くしているところです。

各研究グループの今年度の活動報告

学習指導・開発研究グループ

今年度、学習指導・開発研究グループでは、「1人1台端末の活用による情報活用能力の育成」を重点とし、本研究グループが令和4年度に作成いたしました「情報活用能力体系表【釧路市版 第1版】」（以降、釧路市版体系表）をもとにした授業実践を積み重ねました。そして、研修講座の中で釧路市版体系表と結びつけた授業提案を行い、それらを研究紀要にまとめました。以下、今年度本研究グループで行った実践について2つ紹介させていただきます。

1つ目は、「釧路市版体系表をもとにした実践事例集」の作成です。情報活用能力の育成を目指した授業実践について、本研究グループ委員や釧路市内の先生方の実践をもとに、様々な学年や教科にわたって先生方が活用しやすい内容となるよう作成しました。実践事例集では、授業の目標を達成するために情報活用能力をどのように発揮させるのか、先生方にイメージしていただけるような工夫を凝らしています。



2つ目は、釧路教育研究センター研修講座「1人1台端末を活用した情報活用能力の育成」における授業提案です。第1学年数学科「平面図形」の授業において、本時の目標達成のために、釧路市版体系表の「思考力・判断力・表現力等」に分類された項目を重点にした授業を行いました。授業後の研究協議では、参加していただいた多くの先生方から「端末の使用による効果が感じられた。」「授業の目標を達成するための端末活用の在り方について、改めて確認ができた。」などの感想をいただきました。

研究紀要には、上記の活動についての詳しい内容を掲載しておりますので、ぜひご活用いただければと考えております。本研究グループの取組が、先生方の日々の実践の一助となれば幸いです。

学習指導・開発研究グループリーダー 下山 智之（鳥取西中学校）

【研修講座報告】

研修講座名	実施日	場所	受講者
1人1台端末を活用した情報活用能力の育成	令和5年12月20日（水）	鳥取西中学校	50名

講座の内容

釧路市版体系表に基づいた授業公開や研究協議を通して、1人1台端末を活用した情報活用能力の育成について理解を深めることをねらいとした研修講座を実施しました。第1学年数学科「平面図形」の授業公開についての研究協議後半では、「1人1台端末を活用した情報活用能力の育成における各校の実践や授業づくり」について交流を行う中で次のような成果と課題が見えてきました。

成果	課題
<ul style="list-style-type: none">多様な考えの共有が瞬時にできるため、共通点や相違点に着目するよう教師が促すことで、集団思考における練り合いを促進することができる。視点を当てている「情報活用能力」が、発達段階に合わせて体系化されているため、どんな子供の姿を目指せばよいのかがわかりやすい。	<ul style="list-style-type: none">端末を使用する目的や意図を教師が明確にもっていないと教育効果が上がらない。端末の持ち帰りができない場合、家庭学習に端末を生かすことができない。ノートに学習の記録が残せないことへの配慮をどのようにすればよいのか明確ではない。

受講者からのアンケートより

・研究協議の中で、中学校の先生と端末を使って学習している内容を詳しく話すことができました。その中で、「中学校では釧路市版体系表に示されている段階まで情報活用能力が育まれた状態で入学してくれるとありがたい」という話を聞いて、釧路市版体系表の大切さを改めて学びました。

子ども支援研究グループ

子ども支援研究グループは、「釧路市内各校における子ども支援に関する課題を踏まえ、いじめ、不登校への対応、個に応じた指導の進め方等について、調査、研究し、釧路市における子ども支援の在り方について、実践を蓄積しその成果を発表すること」を目的とし、「不登校の児童生徒への対応」をテーマに、2ヵ年計画で研究を進めて参りました。



本研究グループでは、昨年度、市内各小中学校における不登校児童生徒の実態調査を中心に取り組みました。その中で、不登校の要因や背景が多岐にわたること、児童生徒理解や保護者との連携がより一層求められていること等が明らかになりました。

そこで、2年目の今年度は、前年度の調査をもとにした各校の実践を分析して研究紀要にまとめました。この紀要では、「基本編」、「日常の心構え編」、「実践事例編」の3部構成とし、①授業、②学級経営、③情報共有、④保護者との連携の4つの観点を軸として、不登校児童生徒に対する早期対応・長期対応についてまとめることができました。特に「実践事例編」では、学級担任としてできることに加え、小学校では不登校対応コーディネーターや通級担当等、中学校では教科担任等と校内でどのように組織的に連携を図って対応してきたのかについてまとめました。

いじめや不登校への対応に悩む若手教員に限らず、どの先生方にも手に取っていただきやすいよう、市内小・中・義務教育学校における実践事例も数多く紹介しておりますので、ぜひご活用いただけると幸いです。

子ども支援研究グループリーダー 大場 公博（昭和小学校）

郷土読本・地域学習研究グループ

郷土読本・地域学習研究グループでは、「郷土読本を効果的に活用したふるさと教育の在り方について研究するとともに、関係機関と連携しながら、郷土読本『くしろ』の内容検討を行うこと」を目的とし、研究を進めました。今年度は、釧路市のふるさと教育に関する研究、小学校第3・4学年で活用する郷土読本『くしろ』の編集・改訂、そして、ロイロノート・スクールの資料箱の整理などの活動を行ってきました。

ふるさと教育に関する研究における成果については、資料にまとめたものを各校に送付させていただく予定です。この資料には、ふるさと教育の学習に協力していただける施設や組織をまとめた「釧路ふるさと教育ひと・こと・もの」リストも添付しておりますのでご活用ください。

郷土読本『くしろ』の内容検討では、次年度の教科書の部分改訂に合わせて編集・改訂作業を進めてきました。今後は、レイアウトなどの改訂も進めていく予定です。令和6年度版『くしろ』の特徴は、新たにSDGsの視点が入り入れられていることです。社会科の内容には、SDGsと関連するものが多くあります。ぜひ、授業でもSDGsに関連付けて『くしろ』を活用していただければと思います。

最後に、ロイロノートの資料箱について紹介します。この資料箱には、郷土読本に関わる資料が保管されています。今年度は、ロイロノートの資料箱がより使いやすくなるように、資料箱の整理を進めてきました。單元ごとに資料をひとまとめにすることで、一度のダウンロードですべての資料を活用できるように整理いたしました。保存されている資料は、授業の役に立つものがたくさんあります。ぜひ授業の中でご活用ください。



郷土読本・地域学習研究グループリーダー 小野寺 隆（鶴野小学校）

第2回合同研究グループ委員研修会

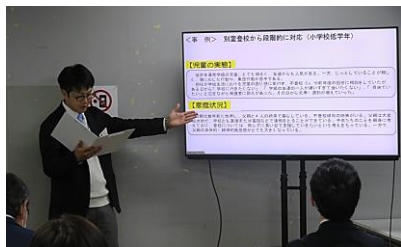


令和6年2月16日(金)、フィッシャーマンズワークMOO3階ふらっとにて、第2回合同研究グループ委員研修会が行われました。

各グループが今年度の活動について紹介し合い、互いの研究内容について理解を深めました。今後はそれぞれのグループで行っている内容を関連付けながら、研究内容を広げたり、深めたりすることができるよう、グループ

間で連携を図りながら活動していく方向性が共有されました。

研修会につきましては、オンデマンドにより配信いたしました。次年度も、釧路市の先生方の日々の実践に役立てていただけるような研究を推進していこうと決意を新たにいたしました。



釧路教育研究センター 教育講演会



令和6年2月3日(土)に、コーチャンフォー釧路文化ホール小ホールにて「教育講演会」が行われました。今年度は、文部科学省初等中等教育局学校デジタル化プロジェクトチームリーダー、武藤久慶氏をお招きし、何故令和の教育改革なのか、GIGAスクール構想なのか?～ネクストGIGAを見据え、教育DXの先進事例から学ぶ～という演題で、ご講演いただきました。

豊富なデータをもとに、加速度的に社会の在り様が変わり続けていることや、そういった社会を生きる子供たちに必要な資質・能力とは何かを示していただき、教育改革やGIGAスクール構想の意義について再確認することができました。また、デジタルかリアルかの二項対立で議論するのではなく、デジタルによってリアルを充実させていく重要性について、全国の魅力的な実践例の紹介を通して説明していただきました。日常的なGIGA端末の活用により、コンパスの使い方など実技の動画を必要に応じて繰り返し見る、1人1人の考えを可視化して話し合い活動をするといった、自分で学びたいことや学び方を選択し実行する、自律的な学びを生き生きと体現する子どもたちの姿が印象的でした。そのどれもが、「遠くの学校の特別な実践」ではなく、明日から教室で、あるいは職員室でも、すぐに取り入れられる日常の実践であり、参加者にとっては、デジタルによってよりよい授業や働き方の改善につながる多くのヒントを得られた貴重な機会となりました。